

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】
【リンクはご自由にお貼りください】「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)
第3回期日(20240426)提出の書面です。

令和5年(ネ)第292号「結婚の自由をすべての人に」訴訟控訴事件

控訴人 大江千束 外

被控訴人 国

控訴人大江・小川 意見陳述要旨

2024年4月26日

東京高等裁判所第2民事部CD係 御中

控訴人 大江千束

控訴人 小川葉子

(二人で陳述をしますが、主に大江がお話しますので、以下では、「私」は大江、「私たち」は大江と小川の二人を指します。)

1 私と小川は、1994年からパートナーとして暮らし、今年で30年になります。この30年間、レズビアン女性が集まれる場所作りなどの活動に二人で取り組んできました。セクシュアルマイノリティへの差別や侮辱が今よりもっともっと溢れていた時代を、「セクシュアルマイノリティであっても、同じ尊厳を持った存在である」と社会に訴え、立ち向かってきました。

そんな私たちにとってすら、婚姻を手に入れるためこの裁判の原告であり続ける道のりは過酷なものでした。法制度に対して声を上げることでいっそういわれのない偏見やハラスメントにさらされたからです。それでもこの訴訟の原告であり続けた理由を、裁判官にわかってもらいたいです。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】
【リンクはご自由にお貼りください】「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)
第3 回期日(20240426)提出の書面です。

2 私たちは同じ職場で、困難を抱える人々への支援事業に取り組んでいました。私たちのパートナー関係を知る人も多く、理解者もいました。同僚からの応援の声に背中を押され、私たちはこの訴訟の原告になることを決めました。

一方で、もともと衝突することのあった上司が、私たちがセクシュアルマイノリティであることや、国とたたかう訴訟をしていることを口実に私たちを攻撃するようになりました。例えば、「セクシュアルマイノリティは社会性がない」といった言葉を職場で繰り返しました。セクシュアルマイノリティへの偏見に他なりません。私たちは、その発言に抗議などしましたが、かえって上司の反感が強まりました。

この訴訟の原告としての活動にまで、その上司は「目立たないように！」と釘をさしてきました。しだいに上司の目を恐れ、取材等も積極的に受けられなくなっていきました。

上司がこうなると迎合する同僚もいます。SNS上で私たちを悪く言う同僚までいました。そのような書き込みを見てしまうのが怖く、SNSには一切手を出すことができなくなりました。

最終的には、二人で懸命に勤めてきた仕事をやめざるをえませんでした。

3 頭では上司の言動が不当なものだと分かっているけど、「同じ「婚姻」ができない私たちは、マジョリティに対等な存在として受け入れられない」と社会から拒絶されたように感じ、打ちのめされてゆきました。

ズボンが緩くなって何気なく乗った体重計で十数キロの体重の減少に驚きました。基礎疾患を持つ私は主治医に体調の異変を告げると精神科の受診を勧められました。精神科では「適応障害」と診断され、投薬が始まりました。薬の副作用で呂律が回らなく滑舌が悪くなったことは、対話を仕事としている身としては辛い状態となっていきました。体重は最大20キロも落ち、筋力がなくなり、一時は歩くこともままならない状況にもなり、

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】
【リンクはご自由にお貼りください】「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)
第3回期日(20240426)提出の書面です。

一気に老け込んでいってしまいました。

残ったエネルギーは全て仕事に回し、家に帰ると抜け殻のようになった私に、小川は親身に寄り添ってくれました。文句のひとつを言うことなく、家事一切を担ってくれていました。

ある時、私は小川に「原告を降りて、養子縁組みをしようか・・・」と話しました。そこまで気弱になり、追い詰められていました。しかし、小川は「私は養子縁組は嫌だな。親子になりたいわけではないし」と言いました。

訴訟の原告になることを検討していた時には、小川が及び腰で、私が引っ張ったようなものだったので、私はこの時の小川の言葉に目が覚めたように感じました。「小川とは、別の何かではない、婚姻をしたいのだ、そのためにはこの裁判を最後まで見届けなければ」と強く思い直しました。

- 4 今、常に私のことを心配してくれる小川には感謝しかありません。あまりに私が弱っているのです、時には子を想う親のようですらありました。両親が既に亡くなっている私にとって、心配しサポートしてくれる家族がどれほど有難かったことかと思います。

私が抜け殻状態から回復していくと、今度は小川に体調不良が現れました。私を支えてくれた分その反動も大きかったのだと思います。私もまだ万全ではなく、二人して寝込む日もあります。

- 5 それでも、私たちはお互いに二人の何気ない日常をととても居心地良く過ごしています。二人して寝込んでいる時は、私たちと26年間を共にし、三人目の家族とも言えるコンパニオンボードの「まりも」が、騒がずにじっと私たちの行動に合わせてくれています。二人で地域猫の活動をしており、体調が悪い時でも猫の世話は怠りません。

ああ、私と小川の人生は一蓮托生だ、しみじみそう思います。そんな私

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】
【リンクはご自由にお貼りください】「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)
第3回期日(20240426)提出の書面です。

たちの生活、人生を私はただ守っていきたいのです。そのために、二人で
踏ん張って婚姻をかちとる裁判の原告を続けてきました。

6 私たちと同じように、不当な偏見にさらされ苦しむセクシュアルマイノ
リティは今もたくさんいます。

セクシュアリティと「社会性」や「能力」は関係ないのに「セクシュア
ルマイノリティは社会性がない」等と言って憚らない人がいます。それは、
「セクシュアルマイノリティは自分達とは違う異質な存在だ」と線引きを
する感覚が根底にあるからです。マジョリティから「あなたたちは違う存
在だ」と線引きされる社会やコミュニティに身を置くことは、常に緊張し、
警戒し、気が休まることはありません。

そして、このような一つ一つのハラスメントの背景には、婚姻制度を使
えるマジョリティと制度から排除されるマイノリティを線引きして、「セク
シュアルマイノリティは異質な存在」というお墨付きを与えている現在の
法律があるのです。

7 地裁判決では、「社会的承認」がないといって婚姻の自由の保障を認めて
くれませんでした。しかし、同じ存在であると承認されていない社会でパ
ートナーと生きなければならず、法的な後ろ盾もない、その不安感、緊張
感を想像してください。

今、この法廷で私の話を聞いて頂いた裁判官には、「婚姻」できないこと
が違憲だと、明確に言って欲しいです。「セクシュアルマイノリティだから
違う制度でもいい」と裁判官に言われてしまったら、日々の生活の中で、
セクシュアルマイノリティは違う存在だと線引きし、偏見をぶつけられた
とき、私はどう反論したらいいのでしょうか。

婚姻と異なる制度では、「異質の存在」という線引きは続きます。特別の
制度を使うことで、「セクシュアルマイノリティであること」をわざわざ開

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】
【リンクはご自由にお貼りください】「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)
第3回期日(20240426)提出の書面です。

示ることになり、偏見にさらされる不安や緊張も続きます。同じ制度が使えるようになれば、同性カップルに限らない様々なセクシュアルマイノリティたちが、偏見にさらされる危険もなくなっていくはずです。

私たちの苦しかったこの年月の先には、希望がきつとくることを信じています。

以上